ヴィルヘルム・ミュラーのノヴェレに投影された人物像

渡辺　美奈子

序

連作歌曲『美しき水車小屋の娘』と『冬の旅』で知られるヴィルヘルム･ミュラー Johann Ludwig Wilhelm Müller（1794-1827）とシューベルト Franz Peter Schubert（1797-1828）は，それぞれ自由主義思想を持ってナポレオン戦争前後の時代を生き，同じく 30 代前半で没した。両者には，思春期に母と死別して 1 年以内に父親が再婚したという共通点もある。従来ほとんど注目されなかったことだが，私見ではこの体験が，解放戦争から復古期といった時代の影響以上に，両者の作品に認められる孤独，故郷喪失，誠実な愛の希求の要因になっている。シューベルトには母の死と埋葬を含む寓意的物語[1)]があるものの，ミュラーの著作物においては，13 歳時に父に宛てた手紙で慰めと悲しみが間接的かつ控え目に記されただけである[2)]。とはいえ小説『13 番目』*Der Dreizehnte*[3)]で父の急死に叫喚する少年ベルンハルトには，その悲嘆が投射されたと考えられる。本論文では，ミュラーが詩作で表すことのなかった肉親の死を，小説で初めて素材にしたことに，まず注目したい。

2 作目で最後の小説『デボラ』は，過労によって健康を害したミュラーが，妻との最後の旅を前にして，迫り来る死を意識しながら完成した作品である。2 篇とも，刊

---

1) 1822 年 7 月 3 日付。兄フェルディナント Ferdinand L. Schubert（1794-1859）により，「僕の夢」*Mein Traum* と書き添えられている。Schubert 1797-1828, hrsg. vom Landratsamt Ravensburg und vom Kulturamt der Stadt Lindau, wissenschaftliche Bearbeitung von. I. Dürhammer, G. Waidelich, Heidelberg (Braus) 1997, S. 127ff.

2) Müller, Wilhelm: An Christian Leopold Müller, meine Wünsche am Geburtstage meines Vaters, 1. Juni 1808, Werke, Tagebücher, Briefe, in 5 Bänden, hrsg. von Maria-Verena Leistner, Berlin (Mathias Gatza), 1994, Bd. 5, S. 109. 以下 LMW と略記し，LMW 5/109 のように巻と頁数を記す。ミュラーの生涯については，拙著『ヴィルヘルム・ミュラーの生涯と作品 ――『冬の旅』を中心に』，東北大学出版会，2017 を参照されたい。

3) 兄弟の 12 番目に双子で生まれた弟ベルンハルトが „Der Dreizehnte“ と揶揄されることから，その 4 音節に合わせて『13 番目』と訳す。『13 番目』は LMW 3/321-379,『デボラ』*Debora* は LMW 3/381-477 に拠る。

行後程なくして好評を得た。『13 番目』では，13 という忌み数に関わる数々のできごと以上に人物描写が評者を惹きつけ[4)]，『デボラ』の評には，この小説によりミュラーが「同時代の小説家における第 1 の地位にふさわしい」[5)]と記されたものさえある。けれども, 両作品がこれまで本格的な研究対象となったことはないといって良いだろう。

単行本として初めてミュラー伝を著したボリースは, 枠物語を取り入れた『13番目』の作劇法と幾重もの場面転換，双子の対比的な人物描写を評価した[6)]。『デボラ』については，自伝的関連により主人公の「アルトゥールとの類似性に狙いが定められた」[7)]と記している。確かにアルトゥールとミュラーには, 早世した兄弟の中で唯一成長し，溺愛されて育ち[8)]，将来詩人兼学者になることを望みながら貴族に伴ってイタリアへ旅立ったことなどの共通点がある。だがアルトゥールと対照的に見える侯爵にも，百日咳や心気症の症状，ユダヤ人女性との悲恋，理神論者であることなどの自己投影が認められる。また『13 番目』では，ミュラーが併せ持つ生来の相対する性質が，カールとベルンハルトに，それぞれ具現されている。

本論文は，2 篇の小説における主題が多感な人物像であるとの想定のもと，ミュラーが自身にも内在するそのような気質を，いかに複数の主要な登場人物に映し出したかを追求しようとするものである。両作品においては，双子の父以外にも，家族や友人の死ないし重篤な障害に至るできごとが次々に起こる。その中で最も重大と思われる事件を機に，『13 番目』ではベルンハルト，『デボラ』では侯爵がさすらい，何年も後に急死する。本論文では，その転換点となる事件を重視し，死別の悲嘆を中心に考察したい。なおミュラーは，作中でも書簡でも，両小説を「ノヴェレ」と呼称している。出版の際にも，題に「ノヴェレ」が添えられた。ノヴェレは，イタリア語の novella に由来し，「新奇なこと」,「伝奇的で詩趣に富んだ比較的短い物語」を意味する[9)]。通

4) Müller, Methus K. L. (Hrsg.): Almanachsliteratur, Zeitung für die elegante Welt Nr. 216, 26. Jahrgang, 1826, Leipzig (Leopold Boß), S. 1729f.

5) Anonym: Vertraute Briefe über die Almanachsliteratur des Jahres 1828, Blätter für Literarische Unterhaltung, Nr. 232, 8. Oktober 1827, Bd. 2, Leipzig (F. A. Brockhaus), S. 925f.

6) Borries, Erika von: Wilhelm Müller. Der Dichter der «Winterreise», eine Biographie, München (C. H. Beck), 2007, S. 226.

7) Borries: Wilhelm Müller, S. 228.

8) Vermischte Schriften von Wilhelm Müller, in 5 Bänden, Bd. 1, hrsg. von G. Schwab, Leipzig (F. A. Brockhaus), 1830, S. XX. 以下 Schwab, XX のように記す。

9) Vgl. Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm, Bd. 13, S. 966 und Meyers Großes Konversationslexikon, Bd. 6, S. 823f.

常「短編小説」と訳されるが，長さとしては，ミュラーの2作品を含め中編小説程度のものが多い。このようなことから本論文では，以後両小説並びに同様の特徴を持つ作品を「ノヴェレ」と呼称する。

1. 作品成立の背景

解放戦争従軍による学業中断を経て，1814年末にベルリン大学に復学したミュラーは，詩集『同盟の花々』*Bundesblüthen*（1816）と『ミンネゼンガー詩歌選』*Blumenlese aus den Minnesingern*（1816）の刊行，マーロウ Christopher Marlowe（1564-1593）の『ファウスト博士』*Doktor Faustus. Tragödie*（1588頃）の翻訳（1818）により，文学活動の基礎を作り上げた。既に評論活動を始め，大学では学位論文を仕上げようとしていた頃の 1817 年夏，後のプロイセン王室侍従で当時男爵のザック Albert von Sack（1757-1829）が，2年間の予定でギリシア，パレスチナ，エジプトの旅を計画し，ベルリン王立学術協会に教養ある同伴者の推薦を求めた。ヴォルフ教授 Friedrich August Wolf（1759-1824）を通してその役目を引き受けたミュラーは，協会からギリシア碑文収集の委託を受け[10]，教授の勧めにより，まず多くのギリシア人が在住するウィーンへ男爵と共に向かった[11]。同地でギリシア語を学びながら 2 ヶ月ほど滞在した後，2人はコンスタンティノープルへと発つ予定だったが，ミュラーの手紙によれば目的地でペストが流行したため，帰路に予定していたイタリアへと行き先を変更した[12]。だがミュラーがイタリア滞在を延長し，協会から委託されたギリシア碑文収集の義務を果たさぬまま帰国したことを考えれば，シュヴァープ Gustav Benjamin Schwab（1792-1850）が記した[13]ように，この旅程変更は，ミュラーの希望に男爵が応じて行われたと言ってよいだろう。とはいえ長くイタリアに滞在したいと願うミュラーと，各国周遊を望む男爵との間に亀裂が生じ[14]，2人は1818年復活祭後に[15]ローマで別行動を取ることとなった。この不和が，『デボラ』におけるアルトゥールと侯爵の諍いの素材となる。

同年末に帰国したミュラーは，学業再開を断念し，翌1819年に故郷デッサウで高校

10) Müller, Wilhelm: An Herzog Leopold Friedrich zu Anhalt-Dessau, Berlin, 19. Aug. 1817, An Ludwig Tieck, Dessau, 11. Juli 1827, LMW 5/122.

11) Müller, Wilhelm: An F. A. Wolf, Wien, 12. Okt. 1817, LMW 5/123.

12) Müller, Wilhelm: An F. A. Wolf, ebd., LMW 5/122.

13) Schwab, XXVIII.

14) Müller, Wilhelm: An das Konsistorium in Dessau, Dessau, 28. Dez. 1818, LMW 5/130.

15) Schwab, XXX.

教員兼図書館員職に就いた。同じ年，ティーク Johann Ludwig Tieck（1773-1853）がドレスデンに移住し，ほぼ毎夜朗読会を開催するようになった。ミュラーは毎年ドレスデンを訪れては，この朗読会に参加し，ティークからの評価を励みとして数々の詩作をする。ドレスデン時代のティークは，『絵画』*Die Gemälde*（1821）を皮切りに次々にノヴェレを執筆，刊行していた。ミュラーがノヴェレに取り組んだのも，当時散文作品とりわけノヴェレが流行だったからだけではなく，ティークから影響を受けたためと考えられる。

『冬の旅』を含む『旅する角笛吹きによる遺稿詩集第 2 巻』*Gedichte aus den hinterlassenen Papieren eines reisenden Waldhornisten. Zweites Bändchen* が 1824 年 8 月にデッサウのアッカーマンから刊行された後の 10 月 20 日に，ミュラーは「ウラニア」の出版者ブロックハウス Heinrich Brockhaus（1804-1874）に宛てた書簡において，長いことノヴェレを胸に温めており，「ティークとそれについてしばしば話し合った」[16] と記した。このノヴェレが『13 番目』である。ミュラーは『13 番目』執筆中の 1825 年 7 月末から，シュトラールズントの聖職者で詩人のフルハウ Adolph Friedrich Furchau（1787-1868）と共に，リューゲン島へ旅に出た。シュトラールズントは，リューゲン島へ渡る拠点となる都市である。旅を前にした 1825 年 7 月 6 日に，ミュラーはフルハウに宛て，フリードリヒ Caspar David Friedrich（1774-1840）の絵画に関わる風景について詳しい説明を切望した[17]。この絵画は，「リューゲン島の白亜岩」*Kreidefelsen auf Rügen*（1818）と考えられる。フリードリヒは，シュトラールズントから直線距離で 30km ほどの都市グライフスヴァルトに生まれた。彼の作品は，その題材や表現においてミュラーやシューベルトと共通性を持ち，これまで幾度となく『冬の旅』に関する出版物の挿画や表紙に用いられてきた。だが『冬の旅』を絵画で表したかのような強い印象を与える「オークの森の修道院」*Abtei im Eichwald*（1809-1810）や「森の猟騎兵」*Der Chasseur im Walde*（1814）などは，詩作の何年も前に完成している。それに対し『13 番目』並びに同時期に執筆した詩集『リューゲン島の貝殻』*Muscheln von der Insel Rügen*[18]は，ミュラーのフリードリヒへの関心を証明する作品である。『13 番目』では，カールが画家として成功し，シュトラールズントが物語後半の主な舞台となり，大地が削り取られた突出部のように聳え立つリューゲン島の岸辺の印象も語られる。ミュラーは 1825 年 12 月 7 日に『13 番目』の原稿を送付した後，年末にドレスデンを

16) LMW 3/532.
17) LMW 5/341f.
18) 15 篇から成る詩集で，1826 年 9 月に「ウラニア 1827」に掲載された。

訪れ，ティークの前でこのノヴェレを朗読した。『13 番目』と『リューゲン島の貝殻』は，1826 年秋に「1827 年版ウラニア」Urania-Taschenbuch auf das Jahr 1827 で同時に刊行される。確認できる最初の書評[19]が 1826 年 11 月 1 日付であるから，出版は 10 月以前である。

ちょうどこの頃の 1826 年 10 月 7 日に，ミュラーは最後の誕生日を迎え，妻からティークの大きな胸像を受け取った[20]。同時期に再版された『旅する角笛吹きによる遺稿詩集 第 1 巻』には，ティークへの献呈文が添えられている。これは『美しき水車小屋の娘』を含む詩集である。10 月 17 日にティークに宛てた手紙で，ミュラーは新たなノヴェレすなわち『デボラ』に関する言及をした[21]。12 月 30 日にミュラーがブロックハウスに宛てた手紙において，全体の3分の1ほど書いたことが記されており[22]，翌年 2 月に入稿が完了しているので，執筆期間は 2 ヶ月ほどである。当時ミュラーは，公職をしながら百科全書や批評を執筆し，男性合唱団活動をしていた。そこへデッサウ劇場監督の任務が舞い込み[23]，彼は 1827 年初めに極度の疲労に襲われた[24]。それでも『デボラ』の執筆を急いだのは，ボリースによれば旅費が必要だったからである[25]。彼は 7 月末に，妻と共にライン，シュヴァーベン地方へと旅に出た。1827 年 9 月 11 日に『デボラ』を含む「1828 年版ウラニア」の評が掲載されていることから，同誌の出版は旅の間と考えられる。同誌には，道中のミュラー夫妻を 10 日間自宅で歓待したシュヴァープの詩作品 3 篇や，旅の途中で合流した友人ジモリン Ulrich Heinrich Alexander Reichsfreiherr von Simolin（1800-1871）がミュラーのために書いた詩集『ミュラーへ』*An Wilhelm Müller* も掲載された。評者のメンツェル Wolfgang Menzel（1798-1873）は，同誌に掲載された 5 篇の小説の中で『デボラ』が最も優れていると称賛した[26]。

だがミュラーに残された命はわずかだった。シュヴァープをはじめ，ミュラーの来訪を受けたシュヴァーベン詩人らは，彼に迫り来る死を悟った。それから間もなくウーラント Ludwig Uhland（1787-1862）が詩作した「来たるべき春」 *Künftiger Frühling*

19) Literatur-Blatt auf das Jahr 1826. Stuttgart und Tübingen, in der J. F. Cotta'schen Buchhandlung, 1826, S. 347f.

20) Müller, Wilhelm: An L. Tieck, Dessau, 17. Okt. 1826, LMW 5/401ff.

21) Müller, Wilhelm: An L. Tieck, ebd..

22) Müller, Wilhelm: An H. Brockhaus, Dessau, 30. Dez. 1826, LMW 5/410f.

23) Müller, Wilhelm: An Karl Hartwig Gregor von Meusebach, Dessau 5. Dez. 1826, LMW 5/409.

24) Schwab, LIf.

25) Borries: Wilhelm Müller, S. 228.

26) Menzel, Wolfgang: Taschenbuch, Literatur-Blatt Nr. 73, Dienstag, den 11. September 1827, S. 292.

は，ミュラーの来世での春を歌ったものである[27)]。ミュラーは，帰路にヴァイマールでゲーテ Johann Wolfgang von Goethe（1749-1832）に謁見し，9 月 25 日に帰宅して数日後の 1827 年 9 月 30 日から 10 月 1 日にかけて，ほぼ真夜中に永眠した[28)]。間もなくシュヴァープは，ミュラー著作集全 5 巻の編纂に取り組み，序文として「ミュラーの生涯」を執筆し，2 篇のノヴェレを，その第 3 巻に収めた。『デボラ』はハイゼ Paul Heyse（1830-1914）とクルツ Hermann Kurz（1813-1873）により，1910 年に『ドイツ小説宝庫』*Deutscher Novellenschatz*[29)](1871-1876）にも掲載されたが，2 篇揃ってノヴェレが再び刊行されるのは，ミュラー生誕 200 年に当たる 1994 年のことである。

2.　当時のノヴェレとミュラーのノヴェレ

『13 番目』は，カールがイタリアへ発つ 7 月の夜，ベルリンのワイン酒場から物語が始まる。カールは，ハレからやってくる郵便馬車に，この酒場に立ち寄るよう依頼していた。円卓の仲間は，財務官，歴史家，哲学者，詩人といった知識人であり，機知に富んだ話をしながら会食を楽しんでいた。ところが給仕のフランツが「13 人のみなさま」と言った時に，カールは円卓についた人数が 13 人であることに気づき，激昂してしまう。フランツを呼んで 14 人になり，しばらくは再び会話が弾んだものの，カールの様子を気にした哲学者が，心に掛かるものを吐き出してしまうよう，彼を諭した。ためらいながらもカールは，郵便ラッパの音が聞こえるまで，そこで長い話をする。それが最初の作中作である。友人たちはみな，弟ベルンハルトの生来の性質に強い関心と興味を抱いた。なかでも詩人は，ミュラーと同様，作品としてはこれまで詩ばかり書いてきたのだが，ベルンハルトを題材として「ノヴェレ」の領域に手を伸ばしたいという欲望に駆られる。『13 番目』の著者は，この詩人と設定されている。

---

27) Vgl. Schwab, LXIII.

28) ミュラーの息子マックス Friedrich Maximilian Müller（1823-1900）によれば 9 月 30 日没だが（Gedichte von Wilhelm Müller, mit Einleitung und Anmerkungen, hrsg. von M. Müller, zu 2 Theilen, in: Bibliothek der Deutschen Nationalliteratur des 18. und 19. Jahrhunderts, Leipzig (J. A. Brockhaus), 1868, S. LXI），ハットフィールド James Taft Hatfield（1862-1945）は「信頼できる証明書に基づくと，彼の墓石も証明するように，その死は実際夜中をほんの少し過ぎていたので 1827 年 10 月 1 日だった」と記している。Wilhelm Müller, Gedichte, vollständige kritische Ausgabe, mit Einleitung und Anmerkungen, besorgt von J. T. Hatfield, Berlin (B. Behr's Verlag), o. J., S. XXXI.

29) 全 24 巻，計 86 篇で，『デボラ』は第 18 巻に掲載された。Deutscher Novellenschatz, hrsg. von P. Heyse und H. Kurz. Bd. 18, 2. Aufl. Berlin, [1910], S. 1–148, in: Weitin, Thomas (Hrsg.): Volldigitalisiertes Korpus, Der Deutsche Novellenschatz, Darmstadt/Konstanz, 2016.

終章は，2 週間後の同じワイン酒場が舞台である。詩人はノヴェレの構想を練っており，ベルンハルトの宿泊先に足を運びながら取材をし，結末を考えていた。この取材の様子には，ミュラーが当時の現実の生活から，ノヴェレを生み出そうとする姿勢が表れている。定期的に批評を執筆していたミュラーは, 散文作品を熟知していた[30)]。だが当時, ノヴェレの様式や特性が広く理解されていたとは言えなかったようである。

歴史を遡ればヴィーラント Christoph Martin Wieland（1773-1813）が,『ドン・シルヴィオ・フォン・ロサルヴァ』*Don Sylvio von Rosalva*（1764）第 1 部第 4 章において，文学作品の 1 種として初めて「ノヴェレ」の語を使用した後，第 2 版（1772）で注釈を加え，ノヴェレと長大なロマーンとの違いを簡潔に説明した[31)]。さらに彼は 1804 年に『題名のないノヴェレ』*Die Novelle ohne Titel* の登場人物 M 氏のことばとして，ノヴェレの前提条件を,「理想郷やユートピアではなく……我々の現実の世界の中で行われ……至る所で起こる可能性がある」[32)]ことと表した。ミュラーのノヴェレで起こる事件も，新奇ながらも当時の生活の中で起こり得るものである。

ミュラーが『デボラ』を執筆していた頃，ゲーテもノヴェレに取り組んでおり，1827 年 1 月 29 日に，彼は書き終えたノヴェレをそのまま『ノヴェレ』と命名した。その理由は,「ノヴェレ本来の概念が，起きてしまった前代未聞のできごと」であるのに,「ドイツでノヴェレとして通用しているものの多くは, ノヴェレではなく, ただの物語か, あるいはどう呼んでも良いものだからだ」った[33)]。既にその 18 年ほど前の彼の作品で『親和力』*Die Wahlverwandtschaften*（1809）に挿入した『不思議な隣同士の子どもたち：ノヴェレ』*Die wunderlichen Nachbarskinder: Novelle* も，その意味で本来のノヴェレなのだが[34)]，単独の作品を『ノヴェレ』と題して刊行することで，ゲーテは再びノヴェレの模範を示そうとしたのである。この『ノヴェレ』は，元々叙事詩『ヘルマンとドロテーア』*Hermann und Dorothea*（1797）と同時期に，同様の叙事詩様式によ

30) Borries: Wilhelm Müller, S. 226.

31) C. M. Wielands sämmtliche Werke, Bd. 11, Die Abenteuer des Don Sylvio von Rosalva, in 2 Bänden, 1. Theil, Leipzig (G. J. Göschen) 1795, S. 18.

32) C. M. Wielands sämmtliche Werke, hrsg. von J. G. Gruber, 36 Bänden, Bd. 29, Leipzig (G. J. Göschen) 1821, S. 121f.

33) Eckermann, Johann Peter: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens 1823-1832 von J. P. Eckermann, 1. Theil, Leipzig (F. A. Brockhaus), 1836, S. 319. 以下 Eckermann, 319のように頁のみ記す。

34) Eckermann, 319.

り『狩』*Die Jagd* という題で構想された[35]。ところがゲーテは，ヘクサメーター[36]が『狩』に適しているかどうか疑問に思い，長期中断をしたのだった。1826 年 10 月に，彼は再びこの作品を取り出し，『デボラ』と同時期の 1827 年 2 月にノヴェレとして仕上げた。エッカーマン（1792-1854）の対話録に，30 年の時を経て完成に至る過程と，結末部分を読んだ時の感動が記されている。この作品は，1828 年にさらに手を加えられた上で刊行された。

その頃ティークもまた，ノヴェレの概念を論じた。一部引用しながらその内容を要約すれば，「我々は現在ノヴェレということばを，比較的短い物語なら何にでも使用している」[37]。だがボッカチオ Giovanni Boccaccio（1313-1375），セルヴァンテス Miguel de Cervantes Saavedra（1547-1616），ゲーテらの手本に倣えば，我々はノヴェレという語を，物語や逸話と「同義語として用いるべきではないだろう」[38]。ゲーテの『ドイツ避難民の談話』*Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten*（1795）には，「日常的だが不可思議な事件」，「若者の改悛や改心」という「中心点」が存在し，セルヴァンテスのどのノヴェレにも，このような中心点がある[39]。「真のノヴェレは……いかなる色彩も性格も拒まない」が，「特別に目を惹く転換点」を持つことによって，物語における「他のあらゆるジャンルから識別される」[40]。

ミュラーのノヴェレにおいても，特別な転換点が置かれ，そのできごとにより改悛した者の生涯が語られている。以上のことからミュラーのノヴェレは，様式的にヴィーラント，ゲーテ，ティークらの意に叶ったものと言える。その上でゲーテの『ノヴェレ』と比較すれば，構成，キリスト教的描写，教訓の有無等において相違点がある。ミュラーのノヴェレにおいては，新奇な事件という転換点はあるものの，筋も，物語の頂点も，読者へ伝えたいものも明確ではない。他方ゲーテの『ノヴェレ』には，結末部を頂点とした筋が認められる。ゲーテの言によれば「押えつけたり克服したりで

35) Goethe, Johann Wolfgang von: Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens, Münchner Ausgabe, in 33 Bänden, Bd. 18.1, hrsg. von G. Heneckmann u. D. Hölscher-Lohmeyer, München (Carl Hanser) 1985-1998, (btb Verlag), 2006, S. 1214.

36) 上拍のない 6 詩脚で，強音節間の弱音節数は 1 または 2，ただし第 5－6 強音間は 2 で行末は 1 の詩形。

37) Ludwig Tieck's Schriften. Bd. 11, Berlin (G. Reimer) 1829, S. LXXXIV. 以下 Tieck, LXXXIV のように頁のみ記す。

38) Tieck, LXXXV.

39) Tieck, LXXXVIf.

40) Tieck, LXXXVII.

きないものは，力によって無理にねじ伏せるよりは，愛情や敬虔な感情の助けを借りて制御した方がよいということを示すのが，この小説の課題だった。そうして子どもとライオンに表されるこの美しい結末が，私を刺激して，作品の完成に向かわせたのだ」[41]。またゲーテの『ノヴェレ』では，地上を支配する神の賛美や聖なる天使が詠まれ，旧約聖書のダニエルの物語が歌の基になっているのに対し，ミュラーのノヴェレで起こる重大な事件には，キリスト教文化による差別が関わっている。ミュラーは詩作においても，詩人として活動する以前から，キリスト教文化を批判することがあった。それによる差別が引き起こした事件を，2 篇のノヴェレの転換点ないし中心点としたことは見逃せない。

ミュラーのノヴェレにおいて，場所は詳細に書かれており，時もかなり明白である。『13 番目』は，1815 年 6 月 8 日に定められたドイツ連邦規約第 13 条が話題に上ることと，7 月と明記されていることから，1815 年 7 月から話が始まると推定される。『デボラ』では，1762 年 8 月 30 日生まれの侯爵が，60 歳まで 20 数ヶ月と語っており，デボラの出会いが 20 年以上前の 1799 年で，旅先のローマで謝肉祭期間中に急死することから，物語の冒頭は 1820 年始めである。当時の多くの若者は，ミュラーと同様，学業を中断して解放戦争に志願するか，シューベルトのように作品で戦争に関与した。それゆえ『13 番目』に登場する若者の多くも，アルトゥールも，戦争に従軍したと思われるのだが，ミュラーはあえて解放戦争の話を避け，時代背景よりも個人的な事件に重きを置いた。続く章では，その事件のいくつかを取り上げる。

3. 『13 番目』における死別と事件

カールとベルンハルトは，ザクセン・エルツ山地の小さな町ガイヤーに生まれた。父は錫の抗夫長で，病弱ながら気性が荒く胆汁質だった。他方母は穏やかな粘液質で，カールが母の，ベルンハルトは父の性質を多く受けていた。ベルンハルトは，身体が大きく力も強く，非常に粗野で，兄弟や近所の子から，しばしば「狂った」と付け加えられながら「13 番目」と呼ばれるたびに，相手に流血や青あざの犠牲を払わせていた。カールの左腕にも，弟にナイフで刺された傷痕が残っている。ある日曜日，両親が教会へ出かけた時のこと。カールは仲間と 12 名で遊んでいた。するとその中に入れてもらえなかったベルンハルトが，壁を這い上がり，怪物のごとく飛び降りてきた。彼は顔を黒と赤に塗りたくり，父の前掛け 2 枚を翼のごとく肩に掛けていた。それから彼は，大きな箒の柄で周囲を叩き，絶え間なく「俺は狂った 13 番目だ」とわめいた。

41) Eckermann, 319.

それ以来ベルンハルトは，侮辱によって付けられたこのあだ名を英雄的な名誉称号とすることを思いつき，12 ということばを耳にするたびに「僕が 13 番目だ」と叫ぶようになった。

その後間もなく，父が亡くなった。咳が父の息の根をベッドで止めてしまったのである。カールとベルンハルトは，当時 9 歳と 10 歳の中頃で，屋根裏部屋で一緒に寝ていた。彼らを起こし，そこで祈りをさせるのが常であった母は，翌朝いつもより早くやってきてベッドの前に跪き，双子の朝の祈りに次のように続けた。「父さんの魂を天に迎え入れてください。父さんの亡骸に，あなたの神聖な地で，その聖なる復活の時まで安らかな憩いを与えてください。アーメン」[42]。カールは驚いて一言も発すことができなかった。彼は父を恐れていたため，悲しみを感じなかったのだが，この時は泣いたという。それはただ，母が泣いているのを見たからだった。だがベルンハルトは違った。その様子を，カールは次のように語った。

> ベルンハルトは絶叫しました。母が……両手を押さえ，お願いだから自傷しないでと頼むほどの力強い叫びでした。……弟は，悲しみのあまり極度に動揺し，号泣していました。怪物と言いたいくらいでした。傍に来て慰めようとする誰に対しても，自身に対しても憤怒していました。自分の髪をかきむしり，血が流れるほど手を噛み，駆けて行っては額を壁にぶつけていたので，父の遺体が運び出される際，弟は監禁されねばなりませんでした。そうしないと弟は，何か災いを引き起こしかねなかったからです。[43]

間もなくカールとベルンハルトは，母と共に母方の伯父に引き取られ，マリーエンベルクに引っ越した。伯父は街で最も裕福な刺繍製品製造販売業者で，双子を熱心に教育した。都市部の生活は，カールにとっては快適だったが，鉱山の人々と自然を愛するベルンハルトには耐えられなかった。彼は数え切れない悪戯で，伯父に反抗したのである。また彼は，事あるごとに「僕が 13 番目だ」と発すことを忘れず，あるとき教会の会衆賛美前に，このきまり文句を叫んだ。即日，彼の指導のために宗教の教師ゾルゲンフリートが招かれると，ベルンハルトは反抗の矛先をこの教師に変え，4～5 年の間，学校で数々の悪事を働いた。ゾルゲンフリートには，実子の中で唯一生き残った愛児アルベルトがいた。アルベルトはベルンハルトよりいくつか年下で，ベルン

42) LMW 3/334.
43) LMW 3/334.

ハルトにとっては，父亡き後初めて心から愛すことができた無二の友でもあった。2人は授業中並んで座るのが常で，クリスマス前の最後の授業でも，最後列にその姿があった。そこで事件が起きた。カールの話は，以下のとおりである。

> 「イエス・キリストは12人の弟子と共に食卓につき」と先生が話し始められ,「僕が13番目だ」と弟が甲高い声でそのお話を遮った瞬間，聖書が先生の手から最後列の長椅子に飛んで行ったのです。強い打撃音とすさまじく甲高い叫びが，稲妻と落雷のように続き, 老先生は急死されたかのように倒れて椅子から落ちました。とても恐ろしいことが起こっていたのでした。かなり鋭利な銀の薄板が付いた重い聖書が，当たったのです。でも狙った所にではありませんでした。アルベルトが床に倒れ, 血が絶え間なく額と眼窩からあふれ出ていました。ベルンハルトは，彼に覆いかぶさり，傷にキスをし，涙の雨を降らせ，狂乱者のようでした。……老先生は，意識を取り戻すことなく，数時間後にお亡くなりになりました。神経の発作に襲われたのです。アルベルトの傷は深かったですが，致命傷ではありませんでした。鋭い聖書の角が額を傷つけ，もう一方の角は，さらに強力に額の骨の下に入り込み，眼球を打ち砕いていました。長い苦しみの後，アルベルトは片方の目を失います。ベルンハルトは，血まみれの親友の上で，まだ意識消失しているかのように横たわっていました。……老先生の小間使いの女性たちが……やって来た時に，弟は，もういませんでした。[44)]

ベルンハルトは，アルベルトが一命を取り留めたことを知らぬまま，故郷で盲目の老人から譲り受けたクラリネット1本だけを持って逃亡し，外国からの辻音楽師として生きていた。8〜9年にわたるさすらいの間も，13にまつわる不幸に次々に襲われながら。だが彼はシュトラールズントで，定住の機会を得る。イタリアから来た音楽師として，彼が故郷の鉱員の舞踊歌を吹き，皿が貨幣で満たされ，英雄のような気持ちになった時，1 人の白髪の老人が彼に近づいてきた。老人は，ニコライ教会の塔に住む鐘つきのエリアス・クランハイムというスウェーデン人だった。演奏に感動した老人は, 亡き息子アマデウスが蘇ったようだと語り, ベルンハルトに鐘つきの職を譲り，彼を娘エルスベトの婿として迎えたいと言ってくれたのである。3 ヶ月も経たないうちに2人の結婚式が定められ，ベルンハルトは花婿になった。

ところがそれから間もなくエルスベトは，占い師から13ないし13番目に気を付け

44) LMW 3/341f.

るようにと忠告された。これは亡母より幼少時から言われていたことでもあったという。ベルンハルトは絶望して半狂乱し，死の恐怖に襲われ，その翌朝，再び逃亡した。画家としての名声を得たカールがベルリンに住んでいることを知っていたため，彼はベルリンを避け，近くのシェーネベルクの古い旅籠に3日間滞在した。イタリアへ向かって旅立ったカールが12番目の乗客として乗った馬車は，この旅籠に立ち寄り，もうひとり客を迎えるはずだった。だが同乗していたギムナジウムの生徒たちが，13番目の客が乗車すると知って騒ぎ出したことから，客は馭者に心付けを渡した上で乗車を拒否する。この男が弟だと確信したカールは，発車した馬車から飛び降り，男の後を追い，弟と再会を果たした。

カールは，今は亡き伯父が父親代わりとなって，命を取り留めたアルベルトを養育したことなどを語り，弟を下宿先まで連れて帰った。翌朝，カールは弟からこれまでの話を聞き，一緒にシュトラールズントへと旅立つ。だが弟は途中で馬車を飛び降り，教会の塔に駆けて行った。エルスベトは病に伏しており，夫の声に気づくと激しい発作を起こし，衰弱していた。夫が寝室の扉を開けると，彼女は彼に目を向け，手を伸ばし，語りかけようとした。だが労苦を伴った死が彼女を襲い，その声を制した。ベルンハルトも，その場に倒れた。その夜中，彼は12時の鐘を13回つこうとして身構え，手すりに近づいた。その時手すりが折れ，ベルンハルトは高い塔から落ち，自分の身体で13回目の鈍い音を地面で鳴らした。

カールの友人らは，カールからの詳細な手紙で，双子の兄弟の再会を知っていた。ノヴェレの結末を考えていた詩人が，主役の死を思いつつも生きている人物を殺すわけにはいかないと悩んでいたその時，カールから再び手紙が届く。哲学者がその手紙を受け取り，黒い封印に気づいた。最後まで読むと彼は「詩人に手紙を渡し，苦しいイロニーを込めて語った。『きみのノヴェレは完成した』と」[45]。このように『13番目』は，カールの話や手紙と，友人たちの会話を基にして仕上げられた。13にまつわる数々のできごとは，私見では筋を作るためだけではなく，物語に諧謔的効果を付加している。『13番目』がこのように登場人物の個人的な体験に基づくのに対し，『デボラ』では，革命や戦争のほか，ローマのゲットーの様子やミュラーの恋愛観についても詳述されている。だがここでは，主に侯爵に関わる事件と，その死だけを取り上げる。

45) LMW 3/379.

4.『デボラ』における事件と侯爵の死

フランス革命とヴァンデ戦争で家族の死と直面し，革命戦争において対仏側で戦った侯爵は，ヴァレンシアに近いグラオの港で夏を過ごした。デボラと出会ったのは，1799 年 9 月 30 日の午後，散歩中のことであった。椰子の木陰にいた彼女は，「テオドーラ」と呼ばれ，裕福な商人アロンの妻で，初産後の療養中だった。当時スペインではユダヤ人の入国が禁じられていたが，アロンの商取引は採算が取れるものだったので，容貌や性格からユダヤ人と認識されても，周囲が目を閉じていたという。彼は「アロネト」と呼ばれ，バルセロナで仕事中だった。デボラの最初の眼差しは，稲妻のように侯爵を一瞬で飲み尽くした。しばらくしてから 2 人は，毎日チェスを楽しむようになり，心を通わせた。その頃，次のような事件が起こった。以下は侯爵がアルトゥールに宛ててフランス語で書いた手紙を，著者とされる詩人がドイツ語に訳した文書の一部である。

> 天が私たちの頭上に崩れ落ちたのでしょうか，または足元の地獄が底から昇ってきたのでしょうか。ヴァレンシアの異端審問所に通じた覆面の男たちが，夜中頃，デボラの滞在先のドアをこじ開け，愛する人をベッドから引きずりおろし，失神した彼女を馬車に投げ入れ，カーサ・サンタ刑務所へと連れて行ったのです。彼女は，聖遺物であるキリストの聖顔布を汚そうと聖ファズ教会に足を踏み入れた隠れユダヤ教徒として，また愛の妙薬でキリスト教徒を惑わし，血を汚そうとしてわいせつ行為へと誘った魔女として訴えられました。……異端審問官の姉妹[46]で，好色で知られる女……クララ・フロリディアス……の傷つけられた誇りと嫉妬に燃えた復讐心が，あの女から復讐の女神フリアを作り上げたのです。[47]

クララの夫は，仕事でメキシコ滞在中だった。デボラに出会う少し前，クララの好意を感じ取った侯爵は，その好意に応える形で交際を始めた。だがデボラの出現により，彼はその関係を一瞬にして断ち切ったのだった。クララの嫉妬と怒りの矛先は，デボラに向けられた。侯爵の手紙には，続いて次のように書かれてあった。

> あの女は……無実の者を告訴し，……夜の逮捕を押し通し，……スペインでは聖なると言われる地獄のような法手続きを，……あらゆる手段によって早めたので

46) 姉か妹かは不明である。

47) LMW 3/452f.

> す。デボラが，刑務所で 2 度目の拷問後に亡くなったという知らせが入った瞬間，意識が私を見放し……目覚めた時，私は……衰弱し，冷たく青ざめた白髪の老人でした。[48)]

当時 37 歳だった侯爵は，それから乞食のようにさすらい，負傷してマンハイムにたどり着いた。そのとき，彼に救いの手を差し伸べたのが，アルトゥールの父であった。侯爵の長兄から生活資金が届くまで，彼は侯爵を自宅で看病し，養った。侯爵の資金は，フランス革命前に不穏な動きを感じ取った一家が隠しておいたものである。傷を負いながらも戦争を生き抜いた長兄がスイスに移住し，保管していた。侯爵はアルトゥールの父に恩返しをしたかったが叶わなかったため，彼の息子を，当時多くの文化人がいたイタリアへと誘い，共に旅立ったのだった。

旅の途中，2 人はボローニャにおいて，ローマで絞殺されてゲットー裏の川に遺棄された若者の話を耳にした。若者はスペインから留学していたローマ大学の学生で，彼のミサのために教会が献金を求めていた。この事件は，大衆紙に掲載されるほど関心を呼んだ。侯爵はローマ滞在中に，その青年の名が「フロリディアス」だと知った瞬間，彼がクララの息子であることに気づく。敬虔な若者に母の罪を償わせる神と，その理不尽で残酷な仕打ちが，侯爵には理解できなかった。彼は「神よ，神よ，これがあなたなのですか。あなたを理解するためには，人があなたと同じ神でなければならないのです」[49)]と叫び，倒れ，宿泊先に運ばれ，再び発作に襲われて息絶えた。アルトゥールへの手紙は，侯爵が「神殿」と呼び，イタリアにも持ち運んでいた小さな部屋の祭壇に折りたたまれてあった。かつて侯爵と口論を繰り返してきたアルトゥールが，この手紙を読んだ直後の様子は，次のとおりである。

> アルトゥールは手紙を読み終えた。既にそのずっと前より，大粒の涙が両目から頬をつたって落ち続けていた。「ああ，愛と苦しみの勇士であるきみよ」と彼は叫び，その手紙を，燃えるように熱い顔に押し当てた。「誠実で聖なる殉教者であるきみよ，……」アルトゥールは，侯爵の遺体がある部屋へと急ぎ，絶望者のごとく，棺の前に崩れ落ちた。[50)]

48) LMW 3/453f.
49) LMW 3/432.
50) LMW 3/454f.

アルトゥールは，陽気ながら批判的で，名誉欲が強い一方，流行に流されやすい若者だったが，侯爵の死後，感傷的で繊細になる。手紙に気づく以前から，彼は祭壇にあったデボラの肖像に強く惹かれていた。その後彼は，デボラの生き写しで，母と同名の娘がローマのゲットーに住んでいることを知り，ゲットーを観察する。その間にゲットー内で事件が起こった。事件のいきさつは以下のとおりである。

クララによって妻が告訴されたことを知っていたアロンは，ローマのゲットーに定住後，クララの息子が当地に留学していることに気づき，青年を巧妙に誘い出し，娘と恋愛関係になるよう仕向けた。その後アロンは，青年の母が亡き妻を異端審問所へ連行させた証拠を見せ，彼を殺害し，遺棄したのだった。既に娘デボラは，青年から洗礼を受け，カトリックに改宗していた。娘は，亡き恋人から贈られたキリスト磔刑像の前で密かに祈るところを，キリスト教を嫌う父に見つかり，激怒した父の手にかかって深手を負い，病院でキリスト教徒として亡くなった。

元々プロテスタント信者だったアルトゥールは，この事件後，ローマでカトリックに改宗し，伝道師になり，アルバノ湖畔の修道院に赴いた。『デボラ』は，2 年前同地を訪れたベルリンの友人が，アルトゥールから聞いた話という設定で書かれている。この友人は，アルトゥールの活き活きとした表情を，ほとんど再び認めることができなかった。世の中から遮断され，その顔は，不動の静かさとこわばった表情を呈していた。彼はデボラの肖像に金の縁取りを付け，その肖像の前で聖母に祈っていたという。侯爵との死別と娘デボラの死が，アルトゥールを寡黙に隠遁する修道士に変えたのだった。

終わりに

ミュラーのノヴェレは，差別が引き起こす悲劇により，今日のわが国も含め，時代や地域を越えて共感を得る。しかしながら，13 に関わる迷信もユダヤ人への偏見も，私見では筋を形成するためのモティーフであって，小説のテーマに設定されたのは，作者自らが持つ繊細で過敏な面が投影された人物像である。カイザーによれば，『若きヴェルテルの悩み』*Die Leiden des jungen Werthers*（1774）のテーマは「多感な青年」であり，「既に婚約している女性への恋愛は，関連したモティーフであって，中心的モティーフでもなければテーマでも全くない」[51]。ゲーテ自身が，シェーンボルン Gottlob Friedrich Ernst Schönborn（1737-1817）に宛てた手紙の中で，「深く純粋な感受性と真の

51) Kayser, Wolfgang: Das sprachliche Kunstwerk, eine Einführung in die Literaturwissenschaft (1. Auflage 1948), 13. Auflage, Bern (Francke), 1968, S. 78f.

浸透力を備えた青年を描出した」[52]と記している。むろんノヴェレとロマーンでは異なるが，ミュラーのノヴェレにおいては，筋よりも人物描写に重点が置かれたと言ってよいだろう。

ミュラーは枠構造を取り入れ，ノヴェレに必要とされる新奇なできごとを，作中作の中で登場人物に語らせた。その事件は，聖書にせよ，教会にせよ，スペイン異端審問にせよ，キリスト教に関わるという特徴がある。しかし作中作の聞き手や読み手には，キリスト教ないしキリスト教文化に関わる事件そのものよりも，それによって深く傷ついた人物への強い関心や熱い思いを語らせた。つまり聞き手や読み手の反応を示すことによって，ミュラーは，読者に同様の受け止め方を期待したのである[53]。

粗野ながら傷つきやすく，わずか 14 歳でさすらい，外国からの辻音楽師としてクラリネット 1 本携えて生きてきたベルンハルト。革命と戦争で主君や兄妹と死別し，デボラ亡き後衰弱したまま一生を終えた侯爵。侯爵の死後，明朗さを失い，娘デボラが殺害された後に寡黙な修道士となって隠遁したアルトゥール。彼らはいずれも，愛する者の死傷に激しく反応し，生き方も生きる道も変えた。故人への愛情が強ければ強いほど，死別の悲痛に苦しめば苦しむほど，その心の中に故人が生きるからである。ミュラーの思いは，彼らのように悲嘆を背負ったまま生きる者の姿にこそ込められている。このようにミュラーは，死別を中心モティーフとして，実生活では表せない自らの多感な面を複数の登場人物に投影し，2 篇のノヴェレを仕上げたのだった。

52) Goethe an G. F. E. Schönborn, 1. Juni 1774, Goethes Werke, Weimarer Ausgabe, Bd. 95, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1987, Nr. 231, S. 171.

53) Vgl. Kayser: Das sprachliche Kunstwerk, S. 201f.